

月報

93号

発行所

青丘文庫

編集・発行★陸 哲 隆

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2F

TEL (078) 734-5989

FAX (078) 735-0660

朝鮮民族運動史研究会 第二三三回例会

一九九四年二月

姜 在彦

「満州の朝鮮人バルチザン」

『満州の朝鮮人バルチザン』（青木書店）ではその中で金日成の役割をかいつまんで、「かれもまた中共黨員として抗日バルチザンを率いた数多くの朝鮮人幹部のなかの一人」ということであつた。

ところがいまかれは、一九三〇年代から今日まで、すべての革命運動を「唯一思想・唯一指導」として、さらにそれを息子金正日に世襲させている。本来解放前の民族解放運動は、それを唯一に指導する党も個人もなく、多面的性格のものであつた。それを個人中心史観に切り替える過程は、党内の肅正と表裏一体をなすものであつた。その主なものだけをあげれば――

第一は、朝鮮戦争直後の一九五三年八月から五年十二月まで朴憲永を中心とする国内派の一掃によつて、一九二〇年代からの国内共產主義運動を、たんなる「宗派集団」の策動とした。

第二には、一九五六年二月、ソ連共產党二〇回大会におけるスターリン批判後、中国延安派を中心として抗日武装闘争に従事してきた延安派が、五六年八月党中央委で金日成のスターリン主義を批判して逆襲され、五八年三月の党第一次代表者会議まで一掃された。

国内派、延安派の肅正とともに、解放後スターリンが北朝鮮に派遣した許哥而を中心とするソ連籍朝鮮人も、一九五〇年代後半期に、肅正または追放して、金日成体制内化した者だけを残した。一九六〇年前後から、党が継承した唯一の革命伝統は「金日成元師を中心とする抗日バルチザン」ということになった。しかし肅正はそれにとどまらなかつた。

一九六六年十月党第二次代表者会議で、朴金李孝淳（いづれも党副委員長）をはじめとする甲山派の肅正がはじまり、六七年五月の党中央委で総括した。甲山派とは抗日バルチザンと連携した国内の地下組織のグループである。それに代わつて、金日成の実弟金英柱が党の中枢をなす中央組織指導部長に登場した。第一次、第二次の代表者会議というのは党規約にない会議で、反対派多数のため党中央委を招集できないばあいのクーデターの会議と考えられる。

一九七〇年に入ると金英柱に代わつて金正日が登場し、七四年には金日成の後継者であることを公然化した。因みに九二年四月に金日成は、大元師、金正日は元師となつた。その世襲体制は金日成のカリスマ性に支えられているが、それがなくなつたときにどのように反応するのか……。

『在日朝鮮人運動史研究会』

第一六三回例会

在朝日本人の女性たち①

「史料」からのアプローチの試み

滝尾 英二

みだしの題目の報告資料(当日配布、B4版百二十)を作成するにあたり、特に課題と思われた諸点のいくつかを報告したい。

その一つは、「歴史は足で書くものだ」と歴史家の間でいふるされている言葉を実感したことである。釜山にある「影島」(日帝時代は「絶影島」といつていた)の遊廓については、朝鮮総督府の史料等には一切出てこない。しかし、釜山の地にいるお年寄はよく知っており、昨年(九三年)十二月のことであるが、私は影島のお年寄の案内で、その跡を訪れた。十二、三軒の元「遊廓」の建物がいまも、当時のまま残っていた。現在は一般の住宅街となっているが、アジア・太平洋戦争末期には、その「影島」遊廓を核として、米軍上陸に備えて配置されていた軍は、周辺の民家を接収して、影島「軍慰安所」をつくった。約五百人の朝鮮人「慰安婦」がこの地に連行され、「兵士」たちによって犯されていたという。そうした事実、日本で文献をあさっていただけでは、わからなかったと思う。歴史研究には、現地での聞き取りがなによりも必要であると思った。

その二は、朝鮮総督府をはじめとする史料は、ある目的をもつて書かれた史料であって、書かれてあることはしばしば事実とは異なっているという確認である。それぞれの史料は、史料批判を経なければ、史料記述をそのまま史料だと取り違えてしまう過ちをおかしてしまう。

例えば、各年度『朝鮮総督府統計年報』の「警察・警察上取締営業」の項に、娼婦、芸妓、酌婦の数が出て来るが、それはあくまでも、朝鮮総督府営業の把握し得て、しかも、一般に公表した数に過ぎない。したがって、実態と統計の数との間には、食い違いがあるのである。つまり朝鮮にいた娼婦等(売春婦)の数の実態数を『統計』はいっているのではない。それは、あくまで日帝の警察が「管理」し得たと思われる数字に過ぎない。日帝警察の手に及ばないところにも、それは存在したのであり(日帝はそれを「私娼」と呼び、悪の存在として宣伝した)そういう意味では朝鮮総督府は、日本人・朝鮮人売春婦の「二重構造支配」を余儀なくされた。朝鮮総督府の「二重構造支配」は、人口、職業、土地……とあらゆる面に及んだ。日帝は己れの支配の及ばない朝鮮人を、一方では武力で鎮圧しようとしたが、結局「支配」し得なかったまま、敗戦を迎えたと考える。

その三は、筆者の「郷土」・「自分史」との関係性を明きらかにし、同時に朝鮮史を研究することは、自分にとつて何なのかを問いつめることである。筆者は、日本人であるとともに、朝鮮侵略の最大拠点の一つであった「廣島」の地で生まれ育った男である。そのことを絶えず問い続けなければ、私の朝鮮史の「歴史叙述」は成り立ち得ない。また「在朝日本人の女性たち」の究明は、日本人男性である私にとつて、差別性を削り落とす意味において、生涯追い続けなければならぬ課題であることも痛感した。

日韓キリスト教史研究会 第四二回例会

一九九四年二月二十六日(土)

「満州伝道会について」 韓哲曦

満州伝道会は一九三三年六月、日本基督教富士見町教会に事務所を置き、同教会長老の退役陸軍主計少將日足信亮を会長として結成された。翌年九月の報告書に、「我国に於いては満州国に対し、軍部は言うまでもなく、各方面とも之と相携えてうごいているのである。然れば我が基督者に於いても批点について大いに考慮する処がなくてはならぬ。ここに於いて満州伝道会は興つたのである。本会は満州人教師をもつて、満州語により満州国人に伝道するのである」と記しており、組合教会の朝鮮伝道、南洋伝道団の南洋群島伝道が日本語でなされたのとは対照的であるが、国策遂行の尖丘という点では同じである。同年九月、奉天(瀋陽)さらに新京(長春)、大連と教会を設立して第一(南満)(主事山下永幸)、翌年から北南ハルビン、チチハルなど第二(北満)教区(主事吉持久雄)、三五年末から徳、囲城、赤峰など第三(熱河)教区(主事福井二郎)へと伝道圏を拡大していき、三七年日中戦争勃発で一二月東亜伝道会と改称し、中国関内、台湾、東南アジアへ、日本軍の侵攻につれて拡大し続けた。三九年現在、教会伝道所数第一教区一〇、第二教区一四、第三教区五、受洗者累計一二九五、会員数一五〇六、教役者五四となった。運営はすべて一月一円五〇銭を何口か納める会員と、一〇〇円を納める日基組合・メソジスト、ホーリネスの各教派、ハワイ日本人合同教会などの継続献金によつてまかなわれる超教派の信徒活動と自らを特色づけていた。

日足は義和団事件のとき主計正として天津に在り、日基に進言して天津教会をつくらせ、日清戦争時には台湾で監督補として兵站総司令に在り、台北教会設立に尽力、日露戦争時には満州軍倉庫長兵站総司令となり、東京からキリスト者青年十数名を倉庫員として特別採用し、礼拝祈禱会を持たせ、大連教会を設立させるなど伝道熱心な軍人ですでに七五才の高齢ながら日夜無給で奔走した。しかし、四〇年十一月彼の死去後、代議士松山常次郎が会長になると、外務省から四一年度三万円、翌年四万円、四三年度は大東亜者から四万円の特別補助金を受け、全収入の七割を占めており、初期の主義からは大きくそれていった。また四〇年一〇月さまざまな批判で山下が、翌年大家族の生活維持のため吉持が主事を辞任し、さらに吉持の後任の原雄一らがホーリネス弾圧に関連して逮捕されるなどのため、第一、第二教区は、急速に衰退していった。逆に四二年頃から第三教区は、福井に傾倒した沢崎堅造ら伝道者が続々と参加して熱烈な伝道を展開したが、敗戦によつてすべて崩壊し、伝道者とその家族一五人は荒野の犠牲者となり、満州伝道会は消滅してしまった。しかし共助会、日本基督教教会の人たちが、熱河伝道の跡をたずねて、熱河、中国東北部を二度も訪れ、五〇年の激動と迫害のなかで、熱河宣教で伝えられた信仰を、今もひそかに守りつづけている人に出会うことができ、感動したと伝えている。

書名	著者
KOREA: THE PENINSULAR ORIGINS OF THE WAR	John Merrill
WAR AND TELEVISION	BRUCE CUMINGS
KOREA'S 1884 INCIDENT	Harold F Cook
POLITICAL LEADERSHIP IN KOREA	Dae-Sook Suh, Chae-Jin Lee
The Asami Library	CHAOYING FANG
THE KOREAN AMERICANS	Brian Lehrer
KOREA ENDURING DIVISION	D.S.LEWIS
Socialism in One Zone	ERIK VAN REE
QUIET ODYSSEY	MARY PAIK LEE
KOREA The Untold Story of the War	JOSEPH C.GOULDEN
KOREA A Study of U.S.Policy in the United Nations	LELAND M GOODRICH
KOREANS IN CHINA	DAE-SOOK SUH EDWARD J SHULTZ
Asian American Literature	Elaine H Kim
Koreans in the United States	Sung-Nam Cho
Koreans in America	Bong-youn Choy
KOREA TODAY	George M McCune
Korea The Politics of the Vortex II	Gregory Henderson
KOREA THE POLITICS OF THE VORTEX	K. HWANG
THE KOREAN REFORM MOVEMENT OF THE 1880	
Growth and Structural Changes in Korea, 1910-1940	Sang-chui Suh
The Rule of the Taewon'gun 1864-1873	Ching-young Choe
KMAG in Peace and War	Major Robert K. Sawyer
Divided Korea-The Politics of Development 1945, 1972	Joung-won A. Kim
Drawing the Line-The Korea War, 1950-1953	Richard Whelan
China Crosses the Yalu	Allen S. Whiting
Immigrant Entrepreneurs	Ivan Light&Edna Bnaulich
North Korea In Transition	Tai Sun An
The Literati Purges: Political Conflict in Early Yi Korea	Edward. W. Wagner
Korean War Almanac	Harry G Summers
The Dreams of Two Yi-min	Margaret K.Pai
A Short History of Modern Korea	David Rees
Politics and Policy in Traditional Korea	James B.Palais

新着図書御案内

研究九△云御案内

合同研究会 一九九四年四月二〇日(日)

△第一部▽

朝鮮民族運動史研究会 第二六五回例会

時間 午後一時半～三時

報告者 鄭承博氏

テーマ「私の在日50年」

△第二部▽

在日朝鮮人運動史研究会 第二三五回例会

時間 午後二時半～五時半

報告者 堀内稔氏

テーマ「柳子明の思想と行動」

日韓キリスト教史研究会 第四三回例会

一九九四年四月二三日(土) 午後二時

報告者 飛田雄一氏

テーマ「兵庫の朝鮮人キリスト者」

*場所はいづれも青丘文庫にて